

山寺「夜行念仏」の形態と歴史

—— 研究の現状と問題点 ——

渡辺喜勝

東北大学医療技術短期大学部一般教育

“Yagyo-Nenbutsu” in Yamadera

—— The Present Status of and Problems in its Research ——

Yoshikatsu WATANABE

General Education, College of Medical Sciences, Tohoku University

Key words: 山寺, 夜行念仏, folk-belief

In Yamadera (Yamagata Prefecture), some kind of religious services are annually held by the secular believers, from the evening on 6th of August through the following morning. Yamadera is one of the holly places which have long been called “Ushu-koya”.

Those who attend the services climb up the mountain chanting the prayer, stay overnight at the temple on the summit, and climb down the mountain in the following morning chanting the prayer.

According to the old historical documents or the documents found on the monuments, this religious event has been held from the early years of the Edo era on.

This paper aims to report the present status of the services and also to consider them from the historical point of view. It also points out the significant respects in the present status and in the history, respectively, as a preparatory work to consider the faith in the form of pray in a holly place at night.

はじめに

山形県山寺(宝珠山立石寺=天台宗)の山内で、毎年8月6日夕方から翌朝にかけて、「夜行念仏」と称される民間の念仏行が行われている。現在は2組だけの講中によって維持されているにすぎないが、かつては念仏者たちの提灯行列が、麓から山頂まで続くほどの盛況だったと伝えられている。

念仏者たちは、山麓の民家の何軒かで〈供養〉を済ませた後、山内に入り、根本中堂での〈回向〉に始まって山を登り、途中の定められた堂社・小祠

での念仏行を行う。そして夜半頃、山腹の奥の院に至り、そこで夜を明し、翌朝再び回向を行いながら下山する。

この念仏の目的は、一義的には〈死者供養〉とされている。周知のように山寺は、古来「羽州高野」とも「霊場」とも称されてきた。山内にはおびただしい供養碑や五輪塔、あるいは塔婆や板碑が納められ、なかば土に埋もれて苔むしている。これらは繁茂した杉の巨木とあいまって、訪れる者に一種独特の雰囲気を与えている。

また山寺には、「高野」の名に違わず今も宗派に関係なく〈納骨〉が行われている。このことは、慈

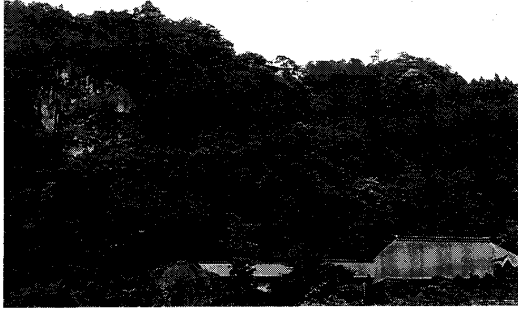


写真1. 山寺全景

覚大師「開山」とされる名刹立石寺の峻厳さとはまた別の一面を伝えるものとして興味深い。

このように山寺には、一見はなはだ多様で複合した〈信仰〉が生きている。小稿で扱う夜行念仏は、その一事例にすぎない。

従来、山寺の〈信仰〉に着目し研究した先学の業績は多い。夜行念仏に限っても、管見では次のような業績が注目される。まず榊泰純氏の『立石寺夜行念仏回向文』（私家版・昭和41年）、『日本仏教芸能史研究』（風間書房・昭和55年）の両著は、研究上貴重な示唆を含むものである。氏は、古くから伝わる膨大な「回向文」（念仏時の詠歌）を収集し、これら両書で体系的に編集して解釈を試みている。これらはその後の夜行念仏研究の基礎的資料となったものである。

また月光善弘氏ならびに大友義助氏の論考も有意義である。前者は、夜行念仏と、氏の従前からの関心である「一山寺院」、特に密教との関連を指摘したものであり¹⁾、後者は、夜行念仏を含む山寺の信仰の諸相を、「庶民信仰」として概観したものの²⁾で、ともに信仰考察のうえで参考になる。

さらに、竹田賢正氏の「山寺夜行念仏の習俗と歴史」（草稿・昭和60年頃）と題する一連の報告書は、当該念仏の歴史性・伝承性を探る場合、注目すべきいくつかの指摘を行っている。この種の民間伝承の多くがそうであるように、夜行念仏もその歴史を伝える史料は極端に少ない。そうしたなかで、氏は板碑とわずかの古文書を克明に踏査し、夜行念仏の系譜を跡づけている。

小稿は、これらの先学の研究を参照しつつ、現

行の夜行念仏の実態を把握し、今後の研究のための問題点を描出しようとするものである。すなわち、現在までの研究報告と、平成6～7年における著者の実態調査で得られた知見とを比較検討することを当面の課題とする。その場合、特に形態上の問題と歴史的な問題とを主にしたい。これらを、著者の関心である〈信仰論〉に即して抽出しておくことにする。

前述のように、山寺には多面的かつ重層的・複合的な信仰が予想される。それらの要素を逐一抽出し、厳密な考証を加えることはもとより難事ではあるが、著者の目的は限られた資料と当事者の現在の関わり方から、できるだけそれに近づくことにある。

したがって小稿は、その予備作業の一端をなすものである。

1. 形態上の問題

現行の夜行念仏（夜念仏）の形態については、前記の先行研究のなかでも竹田氏の報告が最も詳しく忠実に伝えていると思われる。氏の調査は、昭和60年前後のものであるが、現況もほとんど同じだからである。

現在この念仏を行っているのは、昭和46年に結成された「山寺夜行念仏保存会」に属する山形市山寺地区の「芦沢組」と、天童市高擗地区の「高擗組」の2組だけである。

行事は「新暦」の一般化で、現在は8月6日夕刻から7日にかけて行われているが、以前は旧暦の7月7日から行われていたものである。この日は、大友氏の所説によれば、当地方の「盆入り」に当るといふ。これを「七日益」と称し、墓掃除などを行ったとされている³⁾。この期日の点からも、夜行念仏にいわゆる亡魂供養の性格が特徴づけられたものと思われる。

以下、形態上の要素として、〈組織〉〈参拝巡路〉〈装束〉〈回向文〉の順に略述しておく。

〈1〉 組織

現行の上記2組の念仏組織は、構成上その成員は次のようになっている。会は、会長（立石寺住

職)・副会長・先達・会員の十数名からなる。「保存会」結成以前は、それぞれの地区が講組織で運営されていたと思われる。たとえば芦沢組の石山和夫氏所蔵の「回向文記」には、昭和4年時での「夜行念仏講中名簿」が付記されているし、榊氏の調査報告でも、高揃組の大正6年の「夜行念仏講」結成が知られる⁴⁾。このように組織自体は「保存会」の名称をもつが、実態は自治体や他の団体などからの援助があるわけではなく、ほとんど会員らの自主運営で行われている。ただし会長職に当る立石寺は、いわゆる「元寺」として、後で示すように会員たちのお世話役を担っている。

また先達は、会員の指導者としての役割をもつ。かつては「長老」や「師匠」と称され、講員とは文字どおりの師弟関係にあったという。師匠は回向文の唱え方をはじめ、作法万般を新入者へ指導したという。現在も先達は「夜行念仏許求」を念仏時に携帯するが、師資相承の名残りを伝えるものであろう。

会員は現在2組とも男性だけである。しかし碑

文から、榊氏がかつては女性の講員もあったことを暗示しているが、これは如何かと思われる⁵⁾。また石山氏談によれば、これもかつては未婚の男子だけで構成されていたといい、夜行念仏の古型の信仰を探るうえで注目されるところである。

なお念仏者たちは、今も「行者」と称されているが、この点も信仰面を考察するうえで興味あるところである。

〈2〉 参拝巡路

平成7年の芦沢組の事例では以下のとおりである。午後4時頃、山寺地区の「コケシ神社」に参集し「笠かぶり」の儀式の後、当地区に新しく建立された「夜行念仏供養碑」の前で回向、その後依頼に応じて一般の民家4軒で念仏を行った後、6時頃立石寺山内に至る。山内では、根本中堂・念仏堂・姥堂・仁王門・塔中4ケ院(性相院・金乗院・中性院・華蔵院)・奥の院(大仏殿)の順にそれぞれ定められた回向文を唱える。そして翌朝6時頃、奥の院での勤行に参加した後、塔婆供養場・開山堂・五大堂・警司祠・立石寺本坊・不動堂を回向巡拝する(図1.参照)。この後、不動堂附近の3軒の商店から依頼され念仏する。夜行念仏一切の終了を意味する「笠はずし」の儀式は、8月1日に行ったという。

この参拝経路は、昭和60年頃の竹田氏の報告とほとんど同じである。ただ氏の報告にある「白山権権」「空也塔」の2ヶ所の回向は平成7年の場合省略された。それでもこの念仏行が、山寺一帯で

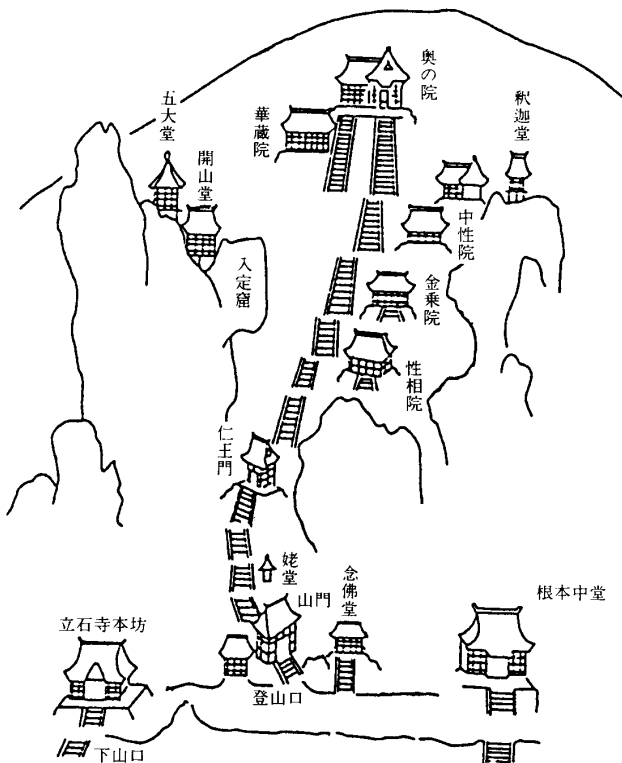


図1. 山寺山内図



写真2. 夜行念仏
於・根本中堂



写真3. 夜行念仏
於・性相院

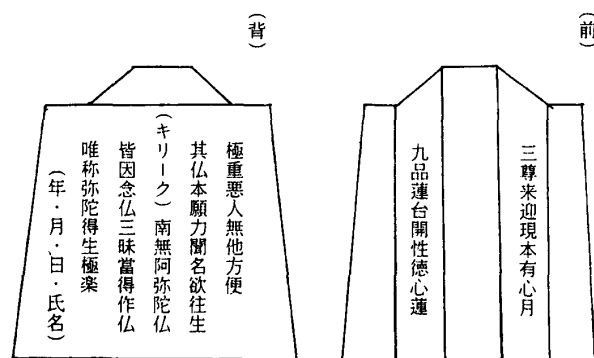


図2. 笈摺の偈文



写真4. 夜行念仏
於・奥の院塔婆場

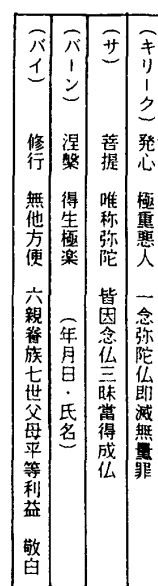


図3. 杖の偈文

これだけ多くの場所を巡拝していることは注目されるところである。このことは同時にこの念仏が多様な神仏・人師に関わっていることを意味し、後で触れる「回向文」と同様、夜行念仏のもつ信仰の多様性を暗示するものとして留意しておきたい。

〈3〉 装束

念仏時の服装は、着物に袴を着用し、上に白木綿で作った「オユズリ」(以下「笈摺」と表記)⁶⁾を羽織り、笠をかぶる。足もとは黒足袋に草履である。手には「金剛杖」と称される木製の四角杖と、扇子をもつ(写真5)。また一人は鉦を持参し、回向文詠唱時に打つ。笈摺・杖には、それぞれ図2・3のような文言が墨書されている。

なお装束に関しては、次の2点を留意しておきたい。ひとつは笈摺着用は、入会后3年経なければ



写真5. 念仏時の装束

ば許されないこと、他は杖と笠に付ける弊が、かつては「おつやもうし」に参集した人々から、〈呪符〉もしくは〈護符〉として重用されたという点である⁷⁾。前者は、前述の「行者」という呼称とも相関して、この念仏行のもつ「修行」的性格を窺わせるものとして興味深い。また後者は、このような行者と一般民衆との信仰的な特殊な関わりを暗示するものである。この2点の吟味は、おそらく夜行念仏における〈死者供養〉という通念の見解に、新たな信仰局面を開示することになると思われる。ともに今後の精緻な考察を経なければならぬ問題ではあるが、みたようにいわば半僧半俗の身なりといい、金剛杖を携えた姿から、著者にはこの念仏が単なる死者供養だけのものとは思えないのである。いずれにせよ、今後の信仰面の考察において吟味したい。

〈4〉 回向文

夜行念仏で詠唱する短歌形式の歌を、念仏者たちは「回向文」と称している。もともとは口承されていたものと思われるが、後で示すように明治期以降講員たちの手で書写されるようになり、現在に受け継がれてきたものである。

榊氏の調査により、現在いくつかの伝本が発見されている。氏は伝本の系譜を、「山寺系」(3種)、「下条系」(1種)、「漆山系」(3種)、「高揃系」(1

種)の4系8種の伝本を確認している。また歌の内容から、「密教的なもの」・「浄土教的なもの」・「地域社会的なもの」の3つに類型化している。歌の数も伝本により異なり、55首から503首に至るまで大きな開きがある⁸⁾。ちなみに、芦沢組が現在所持する伝本には、78首の短歌が収められている。

これらの回向文は、夜行念仏の性格を知るうえで貴重な資料である。上記の歌数の多さは、いうまでもなく歌の内容の多様性を示すものであるが、それは同時に信仰の多様性を示すものでもある。月光氏がこの点を、「密教系の寺院特に一山寺院が、山内に多くの社堂を祀り、数多くの神仏を祈念する様式と非常に類似していることが感じられる」⁹⁾と述べているが、注目しておきたい指摘である。

また歌の内容面での吟味も重要である。特にわが国で広く伝承されてきた「歌念仏」の系譜に連なる民間念仏との比較検討は必須の課題となろう。民間念仏が内包する性格は、現代社会の通念からすればかならずしも〈宗教〉的なものだけではない。日常的なものから、娯乐的・芸能的な要素も多分に含まれている。したがって、榊氏による類型化の再検討も含め、歌の意味の綿密な考証がなされなければならない。この作業も、前述した夜行念仏の信仰の新局面を拓く一要因だろうと予想している。

以上、夜行念仏の形態上の要点として、4点だけ取りあげたが、更により基本的な問題と思われる点を2つほど付け加えておきたい。ひとつは、夜

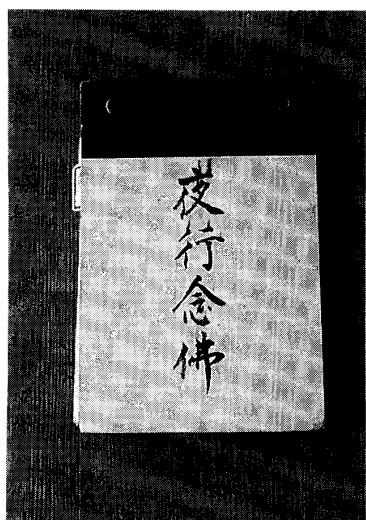


写真6. 回向本 (芦沢組)

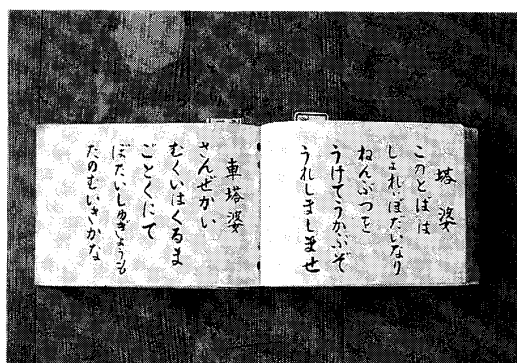


写真7. 回向文 (芦沢組)

行念仏がその名のように〈夜行〉であるという点である。そしてもう一点は、巡拝という形式をとっていることである。この2点についてここで簡単に指摘しておくことにする。

前述のように、この念仏行は夕刻から翌朝にかけて行われる。現在では簡略化され、高擲組はその日のうちに下山するが、これも以前は山頂で夜明ししたといわれているから、〈通夜〉の行がこの念仏の基本であり本旨でもあったことになる。念仏者たちは、夜半かなりの急坂を念仏をあげながら登り、そして夜明けを待って下山したことになる。またこのこととおそらく無縁ではないと思われるが、山寺は前言ったように古来、近郷の人々から〈靈山〉視されてきた場所である。著者は、この靈場での夜行という点を重視したいと考えている。

一般に、日本の祭りの原型が「夜行」であったと指摘したのは、周知のように柳田国男である。柳田によれば、昔の日本人の時間観念が「夕日のくだち」(午後6時頃)からその日の始まりだったことから、夕方から翌朝までの夜間が、祭りの重要な時間帯だったことになる。柳田は次のように述べている。「古い祭りの式は、一般に夕朝二度の供饌の続きであって、諸人は清まはった装束のまま、夜通し奉仕するのが『日本の祭』であった」¹⁰⁾。

夜行念仏が、柳田のいうような「祭りの古型」を保っているとすれば、そこにも潜在的なひとつの意味が含まれていると思われる。端的に言えば、儀礼を通して演じられる死と再生のドラマである。このモチーフが現行の念仏から容易に知られるわけではない。特に幾多の変遷を経つつ、現在明らかに衰微化にある夜行念仏の場合、これを探るのはかなり困難である。ともあれこの問題は、次にみる歴史的な伝承の場面でも注目したいと思う。

もう一点の巡拝形式は、一般にいう〈巡り〉あるいは〈参り〉に関連する問題である。みたように、夜行念仏は一ヶ所だけで行われる「居念仏」と違って、巡りの形態をとる「行道念仏」である。これに関する研究は多岐に亘るが、ここでの著者の関心はとりわけ〈歩く〉という点にある。歩くこと自体のもつ意味と、それに付随する宗教的な意

義に注目したいと思う。周知のように、わが国の信仰形態において歩行を伴ったものは多い。夜行念仏もまさにその一例である。したがってこれも基本的な問題のひとつとして、この種の多様な現象の枠組のなかに据えて考えてみたい。

2. 夜行念仏の歴史と伝承

夜行念仏の伝承性を知る直接の資料は、念仏者たちの記憶とともに〈1〉回向文記、〈2〉供養碑、〈3〉古文書などの古記録である。ここでも先学の研究を参照しながら、それぞれについて概観し問題点を指摘しておくことにする。

〈1〉「回向文」記

榊氏の調査によると¹¹⁾、前記伝本のなかで年代的に最も古いのは、明治36年書写による「矢萩本」である。それは矢萩清五郎(明治13年生・昭和41年没)がその師匠の所持本を書写したもので、111首の歌が収められている。次いで、明治37年の「伊沢本」がある。この回向文記は、その奥書から「立石寺院主・沙門芳田師」による書写本であることが知られ、立石寺の僧侶の夜行念仏への関わり的一端を示している。その他は、書写年代不明のものを除けば、すべて大正期から昭和期において書写されたものであり、現行の回向文記から、明治期を溯って実態を探ることはむずかしい。ただ大正10年書写の「立石寺本」の奥書に「干時嘉永四年辛亥年七月七日 立石寺蔵『夜行念仏根元』ニ依ル 大正十年八月性相院真田写」とあることから、少なくとも江戸末期には回向文は僧侶などにより〈文字化〉されていたと思われる。

このように、回向文の伝本から年代を溯り、夜行念仏の古型を知るのは現時点では困難である。その理由のひとつに、回向文記は所持する念仏者が亡くなると、箆摺などと一緒に納棺され、後に残さないとする伝統があることも一因であろう。この点については榊氏も、「夜行念仏は、その性質上、行者が死ぬと、行者の持っていたものを、その信仰の証しとして、死者と共に葬ってしまったので、資料が残りにくく、……」と述べている¹²⁾。

しかし「資料が残りにくい」つまり文字史料と



写真 8. 念仏供養碑（山寺山内）



写真 9. 念仏供養碑（山寺山内）



写真 10. 空地塔（山寺山内）

して残されなかった最たる要因は、夜行念仏がもつその根本的な性格に起因するようと思われる。そのひとつに、たとえばそれが詠唱念仏であるという点があげられよう。回向文は独特な節回しを帯びた詠唱である。この部分はいうまでもなく本来的に文字化されないものである。文字化された歌詞だけの回向文は、〈回向する〉という信仰の現実場面ではおそらくあまり意味を持たないのではなかろうか。このことは現在の念仏行者たちの感懐からも汲み取れることである。したがって、回向文の習得ならびに伝承は、前言したように、師弟関係における〈口伝〉を基本としたものと思われる。

さらにまた、このような文字資料の欠落の要因に、夜行念仏が一般庶民層により伝承されてきたということ、彼らの当時の識字率の問題もあったかもしれない。いずれにせよ、回向文記のみからその〈原型〉を知るには限界がある。この問題についてはなお後でも触れることにする。

〈2〉 供養碑

夜行念仏に関する供養碑は、竹田氏の調査によれば、山形県内で現在 121 基見つかっている（庄内地方=77、村山地方=44）。最古のものは、山形市三宝岡如来堂の天和 3 年（1683）7 月 7 日の「夜念仏講中」のものである。以後、現在に至るまで

ほぼ絶えることなく、その折々に多くの講中らによって建立されてきたことがわかる。なお最新のものでは、昭和 30 年に芦沢組が山寺境内に建てたもの、および平成 4 年同じく芦沢組が地区内の神社境内に建てたものがある（後者は竹田氏の基数にはもちろん入っていない）。

これらの「供養碑」に関して注目しておきたいのは、さしあたり 2 点ある。ひとつは呼称の問題、他は「空也」についてである。前者は供養碑に「夜行念仏」という表現の他に「夜念仏」の表現が多く見られるという点に関してである。竹田氏の報告では、121 基のうち「夜行念仏」はわずか 6 基だけで他はすべて「夜念仏」であり、しかも庄内地方では「夜行念仏」は一基も発見されていないという。また時代的には、「夜行念仏」記銘のもので最も古いのが、寛政 4 年（1792）であることから、「夜念仏」の方が時代的に先行する呼称ということになる。

このような見方はもちろん「夜念仏」と「夜行

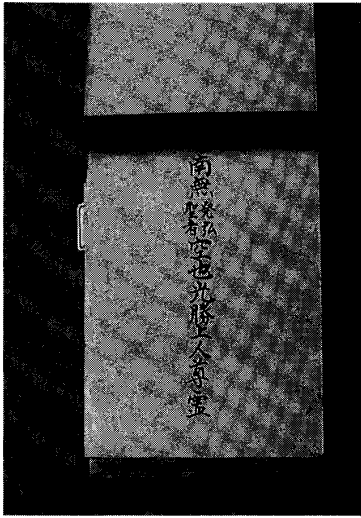


写真 11. 回向文 (芦沢組)

念仏」とを同一系譜とみなすことを前提にしたものである。そして前者を歴史的に古型と考えるもので、これは榊氏以来、先学の共通した見解である。また現行の念仏者たちや、山寺近郷の人々の記憶でも、昔は「ヨネブツ」(夜念仏)と呼んでいたということなどから、最近まで両者の呼称が併存していたことがわかる。

このことは果して単なる併存なのかどうかは検討してみる必要がある。次項の古記録などの考察に関連して、今後吟味してみるつもりである。

後者の「空也」についても、夜行念仏の信仰を探るうえで興味ある問題である。現在、夜行念仏と空也の関連を示すいくつかの点が認められる。第一点は、念仏講中によって建てられた「空也塔」である。榊氏の調査では4例報告されており、天童市の弘化4年が最古で、山寺地藏堂の明治18年がそれに次ぐ。他の二基は、いずれも山寺山内のもので、明治25年「山寺下組」のもの、昭和30年の「山寺夜行念仏一門中」の建立によるものである。前の2基も、その施主が「願主」「世話人」などとなっていることや、書人が「山寺遍明院情田」「天台沙門堯田」であること、また建立月日がいずれも「七月七日」であることなどから、これらの「空也塔」は夜行念仏との関連で建てられたものであろう。特に、昭和30年に芦沢組が「念仏供養碑」と「空也塔」を同時に建立していること

は注目される。

両者の関連を示す第二点は、笈摺と回向文記に書かれている「発弘聖者 空也光勝上人尊霊」の文字である。笈摺については現行のものには見られないが、竹田氏によれば、大正10年作製の笈摺をもつ講員(昭和41年没)から見せられたという。回向文については現行の芦沢組のものにもみられ、回向時には初めに三度唱えられている。〔写真11参照〕

そして第三点は、夜行念仏の創始者を空也上人とする〈伝説〉があることである。榊氏の報告でも、「高揃の古老が伝えている」とある¹³⁾。ただ芦沢組での筆者の聞き取りではこの伝説は得られなかった。ここでは創始説の真偽はともかくとして、そのような伝説があること自体を留意しておきたいと思う。

以上から、夜行念仏と空也(念仏)との関連も、この念仏の伝承性や信仰を考えるうえで射程内におくべき問題と思われる。

〈3〉 古記録など

夜行念仏の管理運営が、直接寺院などによって行われてきたわけではなく、ほとんど講中の自主性に委ねられていたことから、これに関する古文書類は乏しい。したがって、わずかに残存する文献資料から往古の姿を確認するしかないのが実情である。しかしこれも回向文と同じく、そこに確認された部分をできるだけ広く同類の他の信仰儀礼と対称させることにより、ある程度この夜行念仏の古型を位置づけることが可能であるように思う。この作業から、ここでも著者はこの念仏行の信仰場面での特質を抽出しておきたいと考えている。とりあえず現状での知見を素描してみよう。

まず榊氏の『立石系夜行念仏回向文』、『日本仏教芸能史研究』収録の3文献から問題点を整理してみる。

(ア) 「夜行念仏大事」¹⁴⁾ について

この標題で、「立石寺本」と「長老所伝本」の二つが収録されているが、内容はほとんど同じである。しかし撰述年代が無記のため、いつの頃のものかはわからない。内容は要約すると次のように

なる。夜行念仏は①貞観4年7月7日に、山寺の開山慈覚大師によって始められた。②その場所は「常願寺」であった。③念仏の目的は「真善・行法」を妨げる諸々の亡魂を鎮めるためであった。

①については、「慈覚大師開山」説自体疑問視されているから¹⁵⁾、史実とはとりがたい。縁起文によくみられる一種の権威づけのための記述かと思われる。ただ夜行念仏の節回しに、天台系の「声明」の影響をみる指摘もあり、その意味での関連は無視できないかもしれない。

②の「常願寺」は、夜行念仏の歴史を辿るうえで重要な意味をもつ。この二枚の縁起書の冒頭に「羽州山寺衆徒常願寺夜行念仏根元宝珠山阿所川知事」と記されているところから、「常願寺」は山寺一山内の寺で、夜行念仏の「元寺」であったことが知られる。ただこの寺は現存しないし、その痕跡すら不祥である。月光氏によれば、一山寺院の再編成期であった中世末期頃に廃寺になったのだろうということ¹⁶⁾だが、とすると、夜行念仏の源流はその以前にまで遡ることになる。

このように常願寺の実態は史料的に不明な部分が多いが、元寺としてのかつての姿の片鱗は、現行の夜行念仏からも窺える。たとえば回向文に次のような歌が記されている。

常願寺回向

ながむれば今に六字の跡のはや

空になびくむらさきの雲（伊沢本）

また念仏においても、前記五大堂での回向は、常願寺の回向も兼ねているとされ、これらの点からも、常願寺は今なお念仏者たちの心に生きていると思われる。

③については、夜行念仏の信仰をいわゆる亡魂供養という現行のものにも通ずる性格を伝えているが、ここではこの点を留意するに止めておく。

(イ)「高揃夜行念仏略伝」¹⁷⁾

この書は大正5年7月7日の日付になっている。これも要約すれば、①明治初年以前の夜行念仏の元寺は、寒河江市平塩の「栄三坊」(永蔵坊)であった。②その後、栄三坊の「山ノ取締方不注意」により、講中合議の末、元寺を「立石寺」に移管した、とある。そしてこの移管に伴って、「念

仏の元寺の株」も立石寺に移譲し、「重要物一切」は立石寺から受けるようになったと記されている。

①の「永蔵坊」は、月光氏の所説によれば、養老5年、熊野三社を勧請して建てられた平塩熊野社一山組織の「六供職」に位する衆徒であった¹⁸⁾。この記述では「明治初年以前」というだけで、それがどこまで遡るかは不明である。ただこのことから、夜行念仏がもつと思われる信仰要因のひとつ、いわゆる「熊野信仰」¹⁹⁾が想起されて興味深い。

②の元寺の「立石寺移管」に関しては、次の文書で検討したい。

(ウ)「一札之事」²⁰⁾

これは山寺中性院発行の書状であり、次のような文面になっている。

當山參詣夜行念仏之儀ニ付今般改而本方ニ立
歸り於當山取認可相渡間此段為心得一札相渡
置者也

明治五壬申七月朔日

山寺村中性院（押印）

ここで注目されるのは、「改而本方ニ立歸り」の部分である。このことは(イ)と考え合わせると、永蔵坊が元寺となる以前は、立石寺(中性院)が元寺だったことになる。それが永蔵坊の混乱により、明治五年に再び戻ったことを示すものである。以来、今まで中性院が夜行念仏の元寺として、種々の関わりをもってきたものと思われる。

以上3件の記録から、夜行念仏の変遷を探り、それぞれの場面で若干の要点を指摘した。みたように、古文書から知られる夜行念仏の歴史的部分には未詳なところが多い。特に明治以前の様態は、元寺関係の一部を除いて全く空白といってよい。これが現在までの文献資料の限界であった。

こうしたなかで、冒頭で紹介した竹田氏の「草稿」は従前の史的研究を大きく進展させる契機となるものと思われる。氏は昭和63年、平塩永蔵坊文書の現存を確認し、そのなかに約20点の夜行念仏関係の史料が含まれていることをつきとめている。報告には興味あるいくつかの問題提起も為されており、「草稿」で終わったことが惜しまれる²¹⁾。

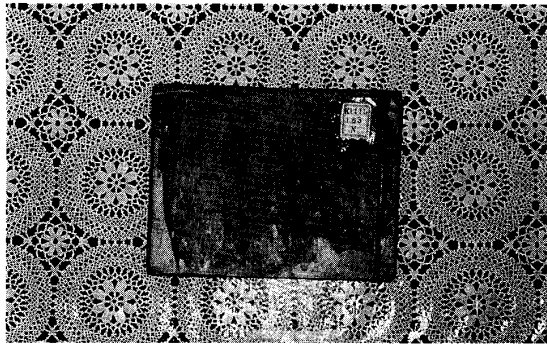


写真 12. 念仏歌讃 (表紙)



写真 13. 念仏歌讃

著者も竹田氏の草稿に導かれごく最近、この文書²²⁾を閲覧した。目下整理中であるが、いずれ別稿で紹介したいと思っている。ここでは紙幅の都合もあり、一点だけ取り上げておくことにする。それは『念仏歌讃』の題する文書である(写真 12)。以下に、その概要を付記しておく。

同書は奥書に「嘉吉元年辛酉二月十五日」の日付けと共に「平塩衆徒 三密修行阿闍梨祐山傳之」という署名がみえる。内容は「念仏修行歌讃」の来暦を述べたもので、大略次のように記されている。

① 「念仏歌讃」は、空海和尚が紀州熊野の證証殿に参詣した際、三尊の来迎があり、「有無両縁の菩提」の為に、那智に「妙法山阿弥陀」の一字を建て、「歌讃」に依る念仏道場に定めた。時に弘仁5年(814)である。

② 「奥州松島の岩屋」で、阿弥陀仏信仰に専念していた「時海法師」が、ある夜一老僧に「タツヌベシ三ツノ御山ノソノ奥ニ 我世ニノコスコトノハゾアリ」の詠歌と共に、「末世の衆生済度のため、速やかに登山すべし」との夢告を受ける。法師はそれに従い、阿弥陀寺で勤行中、「寛弘七年二月十日」の夜半「此書」を受け、七年の念仏修行の後、「長和五年(1016)四月八日、羽州最上成生庄阿所河」に下り「念仏常行ノ道場」として「常願寺」を建立した。

③ 時海法師は、弟子の時圓に「十念の作法」と「歌讃記」を付属し、寛仁3年に73歳で入滅した。

④ 「歌讃記」は、時圓から「羽州金井の薬師堂別当・良心」に伝授され、その後、良心から「阿

弥陀堂院主・良賀」へ、良賀から「羽州村山郡沼尻の平塩衆徒・北院喜教」へ授けられた。

⑤ これを伝え聞いた「常州鹿嶋の念仏行者・常念」は、「永享五年(1433)六月三日」、善教より「念仏勤行の作法」と「歌讃ノ拔書六拾首」を授かり、常州に戻り念仏歌讃を弘めた。

以下、『念仏歌讃』には「夜念仏大事」「結願大事」「念仏行者大事」「念仏修行大事」などが順次述べられており、最後に「夜念仏歌讃」と題して164首(厳密には177首)の和歌が収録されている。

上記の内容で、年代や空海をはじめとする人師たちについてはなお検討すべき問題であるが²³⁾、当面の関心からここでは次の4点だけ指摘しておきたい。

第一点は、ここでいう「歌讃」がその来歴はともかくとして、現行の「回向文」に連なるものであるのか、という問題である。これについては、概観したところ、この歌讃のなかに、現行の芦沢本の回向文とまったく同じものもしくは酷似するものが30種以上も認められることから、両者の密接な関連が指摘できるものと考えている。和歌の詳細な検討や、現存の他の回向文記などとの照合によって、この関連をより明確化したいと思う。

第二点は、「念仏勤行の作法」とは具体的に何かという疑問である。端的に言って、それが夜行念仏に何らかの関連をもつのかどうかという問題である。

ここでいう「念仏勤行の作法」とは多分に上記の一連の「大事もの」を指すと思われるが、現行

のテキストにはこの種の記載がないので文献だけの比較はできない。したがって、「大事もの」の記述内容と現行の念仏の作法とを比較吟味することで、ある程度の解明が得られるものと思っている。なおこの点は、特に信仰上の問題理解において重要な意味をもつことになろう。

第三点は、③の時海による常願寺建立に関してである。前述の文献の記述と合せると、夜行念仏の元寺は、常願寺→中性院・永蔵坊→中性院となるが、これも中性院と永蔵坊の前後関係が不祥である。

第四点は、信仰に関する問題である。「歌讚記」の縁起についての記述からは、少なくとも3つの信仰要素が読みとれると思う。密教、念仏信仰(阿弥陀仏信仰)、熊野信仰(阿弥陀仏信仰)である。これらは前述したように、現行念仏からも窺えるものであり、その限りでは「歌讚記」は注目される。

また「歌讚記」の177首の和歌には、この他に多くの神仏・寺社に関するものや、墓・塔婆供養に関するもの、あるいは念仏行道における折々の歌や「ほめ歌」などが多数含まれている。

前言したように、現行の夜行念仏にもこれら双方の信仰の性格が明らかに認められる。したがって「歌讚記」は、このような様々な信仰要素の錯綜を示す点で、単に歴史的な問題解示に止まらず、信仰考察のうえでも多くの興味ある問題を含むものといえる。なかでも筆者が特に関心を寄せているのは、前述のように生と死に関する個々の儀礼と、そこに潜在すると思われる〈再生〉のモチーフである。「修行大事」や「行者大事」といい、死者供養や念仏往生を詠った和歌といい、「歌讚記」はこの点でも貴重な示唆を含むものと思われる。

いずれにせよ、今後、「永蔵坊文書」および他の傍証資料の検討も含めて、上記課題の解明と、小稿で指摘した信仰上の諸問題を考えてみたい。

注

- 1) 月光善弘「霊場山寺と夜行念仏」、『東北民俗』第2輯、1967年)。
- 2) 大友義助「羽州山寺における庶民信仰の一考察」、

- (『山形県民俗・歴史論集』第1集、昭和52年)。
- 3) 同前。
- 4) 榊 泰純『立石寺夜行念仏回向文』、131頁。
- 5) 榊氏は、夜行念仏関連碑の報告に2基の女性施主の供養碑を加えている。いずれも江戸時代のものであるが、「夜行(行)念仏」の碑文がなく、「南無阿弥陀仏」の名号碑である(『日本仏教芸能史研究』656-7頁)。
- 6) 「オユズリ」は「笈摺」(オイヅルまたはオイズリ)の転訛であろう。当地方では「最上三十三観音」巡礼の際にも着用している。
- 7) 「おつやもうし」は「おこもり」とも称される。榊氏の報告では「(金剛杖につけた弊を)体の思わしくない処につけると、よくなるのだと信じられている。信者たちは賽銭をあげて、一本づつ持ち帰るのである」とある(榊、前掲書、649頁)。筆者も近郷の古老から同様な話を聞いた。ただし現在は一人もいない(竹田氏によれば昭和60年頃からだという)。
- 8) 榊、前掲書、645-8頁、667-689頁。
- 9) 月光、前掲論文。
- 10) 柳田国男「日本の祭り」、『柳田国男集』第10巻、昭和44年、筑摩書房、184-5頁)。
- 11) 榊、前掲書、645-6頁。
- 12) 同、655頁。
- 13) 同、654頁。
- 14) 榊『立石寺夜行念仏回向文』、112-121頁。
- 15) たとえば月光善弘氏の考証によれば、立石寺開山は円仁ではなく、円仁の命を受けた心能律師であろうとしている(『東北の一人組組織の研究』、佼成出版社、平成3年、522-3頁)。
- 16) 月光、前掲論文。
- 17) 榊『日本仏教芸能史研究』、66頁。
- 18) 月光、前掲書、186-198頁。
- 19) たとえば回向文にも「熊野山 ふだらく(つ)のそのみねみねにあとたれて いまぞさかえるみじ(つ)のやまなり」の一首がある。
- 20) 榊、前掲書、665頁。
- 21) 竹田賢正氏は平成7年逝去された。
- 22) 永蔵坊文書は、現在山形市郷土館に一括仮託されている。
- 23) たとえば年代でいえば、「奥書」に「嘉吉元年二月十五日」とあるが、年表によれば「嘉吉」の改元は2月17日である。

渡辺 喜勝

〔付記〕

- ※ 本稿は、平成6年度文部省科学研究費補助金（課題番号・06451007、代表者・華園聰磨）の交付による研究成果の一部である。
- ※ 本稿を成すにあたり、山形女子短大教授・月光善弘先生には種々ご教示いただいた。また調査においては、

山寺・芦沢組先達石山和夫氏をはじめ、会員の諸氏に大変お世話になった。記して感謝申しあげたい。

- ※ 「永蔵坊文書」の閲覧に関しては、山形市教育委員会および山形市郷土館の方々に特別のご配慮をいただいた。お礼申しあげる。